

住民・住居内部との関係性に着目した 路地空間の調査と考察

永山 悟¹・中井 祐²・内藤 廣³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:satoru@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

³非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:naito@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

多くの路地に関する先行研究には、路地空間は良好なコミュニティを形成するという前提が見られる。しかし、路地のような狭小な空間で生まれる人間関係とはもっと複雑なものであり、それが空間に反映されているのではないだろうか。

本研究では路地空間の現状と成り立ちを把握するために、路地空間と住人の人間関係及び住居内部との関係性に着目してフィールド調査を行った。その結果、住居内部と路地空間との関係性、住人同士の人間関係と路地空間との関係性があることを明らかにし、また、路地を対象としたフィールドサーベイの新しい方法の有用性を提示した。

キーワード：路地，コミュニティ，人間関係，あふれ出し

1. はじめに

(1) 背景および目的

いわゆる路地ブームというようなものが世に出てきて久しい。雑誌やテレビでは路地特集等の企画が生まれ、もてはやされている。そういった世間の流れと同様に、1980年代頃から社会学や建築学、都市計画学の分野で路地に関する研究も多く見られるようになった。それらの研究は路地をコミュニティ形成の見本として捉えたものであり、例えば福田陽之輔らは「路地・隙間をかいしたコミュニティに関する研究」の結論において「路地の役割はコミュニケーション発生のきっかけとなる空間」と述べている¹⁾。また、青木義次らは「あふれ出しの社会心理学的効果 路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その2」（「あふれ出し」＝路地空間に置かれた私有物）において「路地のあふれ出しは路地空間利用行為を活性化し、結果的に路地居住者間のコミュニケーションの機会を増大させる」という仮説を提示している²⁾。

しかし、それらの「路地空間は良好なコミュニティを形成する」というような研究姿勢には疑問が残る。路地は狭小な空間に家屋が密集する特殊な生活空間であり、そこで生活する人々の関係はもっと複雑なものではない

だろうか。

この疑問を背景とし、筆者は路地空間とそこでの住民の生活を正確に把握する必要性を感じた。本研究は路地空間の特徴を、住民同士の人間関係及び住居内部との関係性に着目して調査・考察する。

(2) 生活系路地の定義

上野・谷根千研究会は路地を以下のようなイメージの道だと述べている³⁾。

- ・ 行き止り、あるいは通り抜ける人が少ないこと
- ・ 幅4m以下であること
- ・ 両側の家が道を表としていること
- ・ 私有地、私道であること
- ・ 道が住民の共有の空間として意識されていること。つまりそこで路地の行事が行われたり、井戸の管理なども行われたりすること
- ・ 植栽、掃除など住民が手入れを怠っていないこと
- ・ 入口に段差や境界を表す標識があること
- ・ 外から来た者が一瞬、侵入をためらったり、あるいは住民に見咎められたりする

本研究においても、上記のようなイメージの道を路地と呼ぶことにする。また、例えば東京の下町に見られるような住宅が密集した路地を生活系路地(図-1)とし、本

研究の対象は生活系路地とする。つまり、飲食店が建ち並ぶような路地は扱わない。



図-1 生活系路地

2. 方法と調査対象地

(1) 方法

本研究は調査期間に限りがあることから、調査対象路地は1つに限ることとした。複数の路地を調査することは調査結果を比較することができるなど多くの利点があるが、本研究では対象の空間特性や、それが住民同士の人間関係の反映であることを明らかにすることに意義があると考え、対象を1つに絞った。

対象地を選定するための予備調査を行った後、その対象地でのフィールド調査を行い、そしてその調査結果を整理し、考察を行った。

(2) 対象地の選定

予備調査の対象地域は、震災・戦災の被害が少ないという理由と利便性から東京・根津とした。古くからの住居が多く残っているならば昔から住んでいる住民も多く、



図-2 根津の路地

より深い人間関係が形成されていると考えたからである。

まず、根津の住宅地図を用い、幅員4m以下の道を選定したところ、24箇所の道路が該当した(図-2)。そしてその24箇所の道に実際に行き、前章で述べた路地の定義をもとに更なる選定を行った結果、根津1丁目23番地16号の路地(図-3, 4)を対象地に決定した。

尚、この路地の特徴として、根津神社の参道の脇道であること(図-5)、袋小路になっていることがあげられる。



図-3 対象路地



図-4 対象路地入口



図-5 表通り(根津神社参道)

3. 本調査

(1) 調査内容と日程

予備調査で選定した路地を対象として、実測調査、インタビュー調査、資料収集を行った。この調査で最も重要なのは住民と打ち解けることであり、そのために調査開始時の挨拶や正月の挨拶などを行った。また、こまめに現地に行き、頻繁にコミュニケーションを取ることを心がけた。

表-1はその調査日程を示したものである。調査の延べ日数は16日間であった。インタビューは住民に会う毎に適宜行ったため、2~4回と変動がある。

表-1 調査日程

年月日	時間	調査内容	天気
2006.12.07	15:30~15:50	予備調査	くもり
12.12	10:00~12:00	事前インタビュー	晴
	25:00~25:10	写真撮影(夜景)	
12.22	13:00~15:00	挨拶, インタビュー①	くもり
12.23	13:00~15:00	挨拶, インタビュー①続き	くもり
12.25	15:00~15:10	写真撮影	晴
12.26	14:50~15:00	写真撮影(雨天)	雨
2007.01.05	13:00~15:00	新年の挨拶まわり	晴
01.07	10:00~12:00	簡易測量①(建物外周)	晴
01.09	12:30~13:30	空家測量	晴
01.10	10:00~16:00	簡易測量②(あふれ出し, 建物細部等)	晴
01.12	10:30~12:00	簡易測量② 続き	晴
01.15	13:30~13:40	写真撮影	晴
01.18	15:30~17:30	インタビュー②	晴
01.20	13:30~16:00	インタビュー② 続き	くもり
01.25	14:00~16:30	簡易測量③(補助調査)	晴
02.01	12:10~12:30	写真撮影	晴

(2) 調査結果

以上の調査で得られた結果をもとに、まず対象路地の実測図面を作成した(図6~9)。また、対象路地には計16名が図-10のように居住していることが分かった。



図-7 2階平面図



図-6 1階平面図

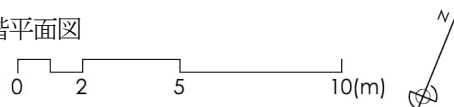
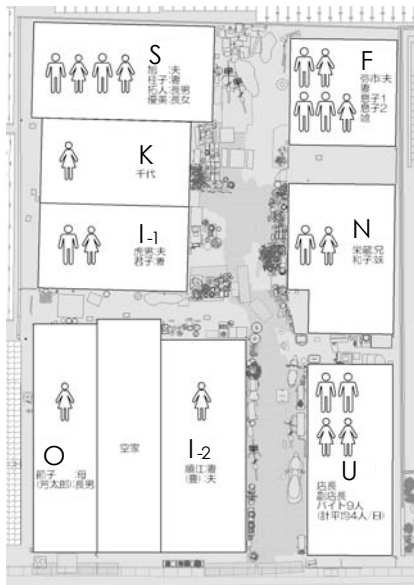


図-8 屋根伏図



図-9 立面図(上：西側，下：東側)



(※ I-1 と I-2 は親子)

図-10 路地の住民

4. 考察

作製した図面とインタビュー調査などの結果と照らし合わせ、考察を行った。項目として、入口、あふれだしの由来、あふれだしの種類、舗装、メーター、給水設備、雨水処理、物干し、間取り、電線・電話線、生活の方向、郵便・配達、ゴミ収集所、風呂、夜の路地、寝る場所、住民の変移、通過可能箇所、窓の形式などについて考察を行ったが、路地空間の人間関係と住居内部との関係性が垣間見られた入口、あふれだしの由来、間取り、生活の方向を特に本論文では述べることにする。

(1)入口

対象路地に面する住居の入口はほとんどが昔ながらの引き違い戸である。しかし、その引き違い戸は周囲の物の配置やサインによって、入口が片方に限定されている

ことが図-11より読み取れる。また、さらに興味深いことに、それぞれの入口が路地をはさんだ向かいの住居の入口と一致していないことが分かる。上野・谷根千研究会は路地の住居の特徴として、プライバシーの配慮のため、入口がはす向かいにずらしてあると述べているが、実際にそうなっていることがここに見て取れる。

以上のことから、入口を限定している住居内部の物の配置と、入口が互いにずれた路地空間の間に関係性が見られる。



図-11 各住居の入口

(2)間取り・生活の方向

図-12は各住居の間取りを示したものである。この図より、各住居の居間は路地との間に玄関等の緩衝領域が存在していることが分かる。F宅のみが路地に面して居間があるのだが、実際は路地に面する窓がトタンで完全に塞がれている(図-13)。つまり、すべての住居において路地から居間への視線がほぼ完全に遮られている。



図-12 間取り(左：1F，右：2F)

居間
玄関
台所



図-13 F宅の窓

また、生活の方向(図-14)を見ると、すべての方向が路地に対して背を向けていないことが分かる。インタビューによると、路地に人が侵入してくる音や路地での話し声は住民に筒抜けであるらしいので、人の気配を警戒するために路地に背を向けずに生活している、ということが推察できる。

以上のことから、プライバシーが侵害されがちである路地空間で、間取りや生活の方向の調整によって外の気配をうかがうことのできる体勢で自らの生活空間を確保していることが分かる。

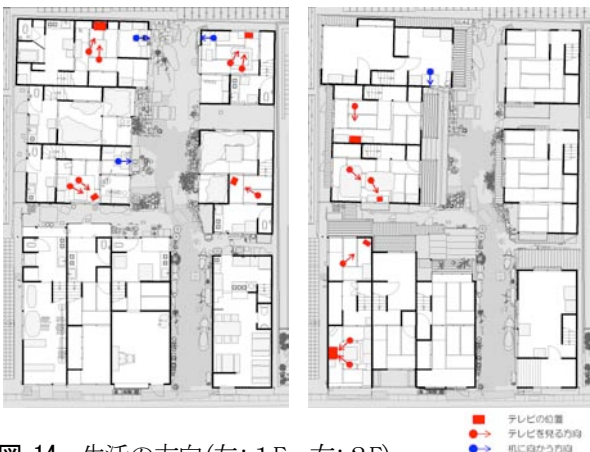


図-14 生活の方向(左: 1F, 右: 2F)

(3) あふれだしの由来

インタビューの結果、あふれだしの理由として以下のようなものがあげられた。

- ・ 物置として
- ・ 植物の日当たり確保
- ・ なんとなく
- ・ その他(防衛)
- ・ その他(管理委託)

これらの回答の中でも、「防衛」は路地空間に見られる特徴的な理由であった。それは、かつてF家が私的領域を拡大してきた際に、S家とK家が対抗策として自らの私有物を置くことにより、領域が侵害されるのを防いだ。そしてその名残が今のあふれだしの領域を形作っているというものである。

これは人間関係から路地空間が形作られた例として非

常に興味深い事例である。



図-15 あふれだしの由来

(4) まとめ

以上をまとめると、対象路地では以下のような空間特性がみられた。

- ・ 住居内部と路地空間の関係性
 - 入口のずれと、玄関周辺にあふれだしの配置
 - 路地と居間の間に緩衝領域があること、路地の気配をうかがうことが可能な生活方向
- ・ 人間関係と路地空間の関係性
 - 近隣へのメッセージとしてのあふれだしの利用

5. 結論

本研究では特定の路地を対象として、人間関係と住居内部に着目したフィールド調査の方法を提示・実践し、いくつかの路地空間の特性を見出すことができた。

今後、更なる事例調査を蓄積することによって、住民同士の人間関係と生活が、路地という外部空間にどのように反映されるかについて、一定の知見を導き出すことが可能と思われる。

謝辞：路地住民の方々にはインタビューにご協力いただいただけでなく、差し入れを頂くなど大変お世話になりました。本当にありがとうございました。また、本研究にご協力いただいたすべての方に感謝致します。

参考文献

- 1) 福田陽之輔他：路地・隙間をかいしたコミュニティに関する研究，日本建築学会中国支部研究報告集，2002
- 2) 青木義次他：あふれだしの社会心理学的効果 路地空間へのあふれだし調査からみた計画概念の仮説と検証 その2，日本建築学会計画系論文集，1994
- 3) 上野・谷根千研究会：新編・谷根千路地事典，住まいの図書館出版局，1995
- 4) 岡本哲志：江戸東京の路地，学芸出版社，2006
- 5) 西村幸夫：路地からのまちづくり，学芸出版社，2006